

普通高校での「発達障害」者支援にとりくむ新潟県立出雲崎高校をたずねる。

「発達障害」とは何か

千葉県君津養護学校に通う東田直樹さんは、いわゆる「自閉症」の少年です。会話は非常に困難だったのですが、ワープロを使えるようになったことで、自分の思いを文章にすることができるようになりました。彼は、こんなふうに当事者の思いを綴っています。

僕たちの障害が、けっしてわがままや自分勝手からきているものではないことを、みんなに理解してもらいたいのです。みんなが僕たちのことをわかってくれたなら、僕たちは一筋の光を手に入れることができるでしょう。

(「自閉症の僕が跳びはねる理由」より)

東田さんが「わがままや自分勝手からきているものではない」と訴えているのは、どんなことなのでしょうか。

学校にはいままで、「落ち着きのない子」「自分勝手な子」と思われ、いつも先生から叱られていた子どもたちがいました。保護者も「育て方が悪い」と言われて悩んだり、肩身の狭い思いをしてきました。

でも、そんな子たちは「勝手な子」でも「育て方が悪かった」のでもなくて、「アスペルガー」や「ADHD(注意欠陥多動性障害)」「LD(学習障害)」などと呼ばれるその人の生まれつきの特徴、いわゆる「発達障害」なのだということがわかってきました。

「障害」と言っても、知的障害を伴わない場合も少なくありません。しかし、知的な能力は高くても学校や職場でトラブルが続き、いじめを受けたり、社会適応がむずかしいケースも多かったのです。

度重なる失敗の経験の中で自信を失い、自尊心を持たずにいる人も少なくありません。

2005年に「発達障害者支援法」が定められ、学校でも「特別支援教育」が始まりました。

これは「発達障害」の人たちの特性を理解した上で、どんな支援や配慮を行えば「ともに」学んだり「ともに」暮らせるか、を考えるためのものだったのです。

「あらたな隔離」の懸念

しかし、これには懸念もありました。

安易なレッテル貼りや、新たな隔離につながるのではないかと。かえって周囲に偏見を広げはしないか。残念ながら、この懸念は一部で現実のものとなっています。それは、特に私立学校において顕著です。

「お子さんは『アスペルガー』かもしれないから、もっと手厚い支援をしてもらえる他の学校に移ってはどうか」と言われて、私学から公立学校への転校を求められたケースも現実によく起きています。

数年前に長崎で起きた少年による幼児殺人事件では、一部のマスコミがあたかも「発達障害」と事件を結びつけるような報道を行いました。

これでは、まさに懸念通りです。中途半端に「発達障害」という言葉だけが広まったことで、残念ながらこんなことも起きてしまっているのです。

新潟県立出雲崎高校を訪ねる

文部科学省は2007年度から「SNEハイスクール(高等学校における発達障害支援モデル事業)」校を指定して、特別な支援を必要としている生徒に対する支援の研究をはじめました。

その「SNEハイスクール」校のひとつが、演歌の「海雪」で有名になった新潟県出雲崎町にある、新潟県立出雲崎高校です。

出雲崎高校のホームページには、「本校は、先生方が一人一人の生徒に向き合い、ていねいな指導を行っています。」という言葉がつつられています。

「あたりまえ」のことです。でも、その「あたりまえ」のことが簡単にはできないのが、現実です。

しかし、出雲崎高校ではその言葉を文字通り実践しようとしている高校として知られています。

この出雲崎のとりにくみから、「特別支援教育」のめざすものについて、何かヒントをもらうことはできないでしょうか。出雲崎高校にうかがって、コーディネーターをつとめる金子先生にお話をうかがいました。



▲新潟県立出雲崎高校

「どんな生徒も支援を必要としている」

竹村 「一人一人に向き合う」ということは、どの学校も目標にしているはずですが、でも出雲崎では、文字通りそれをめざしていらっしゃるのですか。

金子 私たちは、モデル事業が始まったから「発達障害」へのとりくみを始めたわけではありません。

もともと出雲崎高校は、入学してくる生徒の6割近くが不登校やいじめ経験など、何らかの「困り感」を持っていました。そんな生徒への支援にとりくんできたことが、ベースになっています。

見ようとする目がないと、この生徒たちは単なる「問題児」で終わってしまいます。

「特別支援教育」というと「障害」のある生徒のためと思われがちですが、本来「障害」のある・なしにかかわらず、どんな生徒も何らかの支援を必要としているはずなんです。

竹村 神奈川県が「特別支援教育」ではなく「支援教育」としたのも、そのような主旨だったはずなのですが、なかなかそこまでいきません。

あえてうかがうのですが、出雲崎高校では「知的障害」の生徒も支援の対象なのですか。

金子 中学の特学から入学してきた生徒もいますよ。

私たちは、すべての生徒を普通級でとは思っていません。特別支援学校の方が適切な生徒もいると思います。でも支援さえあれば、普通高校で十分学べる生徒もいるのではないのでしょうか。

そんな生徒も含め、「障害がある」のではなく、「困りごとを抱えた」生徒だと考えています。

竹村 「支援級」を置いているわけではないのですね。

金子 受け入れは原則クラスです。すべてのクラスが二人担任制で、さらに必要なら支援員がつかます。

「多忙」という「困りごと」を抱える教職員にもやさしいのが出雲崎なんです(笑)。

竹村 う～ん、職員の共通理解がよくできましたね。

金子 「生徒指導」ではなく「支援」の視点でとりくんでいったら、「こんなふうにはできるんだ」という発見があったんです。その手応えから、教職員みんなが変わっていきました。

竹村 義務制でも、なかなかそこまではいきません。

まして高校では、たいへんではありませんか

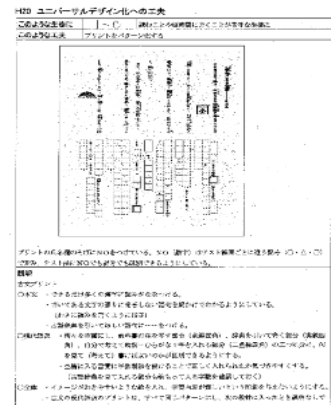
金子 高校というのは、「障害」のある生徒はいない、というのが前提なのです。だから、マニュアルがありません。素人が手探りで試行錯誤しているのが現状です。課題もたくさんあります。

竹村 「ひとり一人の支援」のためには、どんなことをなさるのですか。

金子 「支援」と言っても、必ずしも「特別」なこととは限りません。

今まで「あたりまえ」思ってきた生徒への接し方や、声かけの仕方を少し工夫しただけで、生徒の「困りごと」はずいぶん少なくなって、落ち着くんです。

でも、これはどの生徒にも言えること



▲「授業における工夫集」より

です。「発達障害」の生徒が過ごしやすい学校は、どんな生徒にも過ごしやすい学校のはずです。

竹村 高校の場合、「受け入れる」だけではなく卒業後の「進路保障」もたいせつですよ。

金子 「発達障害」の難しさは、学力があったからといっても簡単には就労につながらないことです。

IQ 100 を越えていても、一般企業に就職できずに作業所に行った生徒もいました。

就労には、やはり基本的な生活管理や対人関係のスキルを身につけさせることが必要です。いままでの高校には、こういう発想はなかったんです。

出雲崎高校では、発達障害者支援センターと連携しながら、就労に必要なスキルの育成や、職場開拓もしています。卒業後の定着支援もします。

ただ、全部を学校だけでできるとは思いません。「無理なことは無理」です。専門的な指導は、支援センターにお願いしています。

「自立」というのは、必ずしも「ひとりで生きていく」ことではないと思います。誰かに助けをもらいながら「自立」することがあっても良いのではないのでしょうか。

竹村 いま、いちばんの課題はどんなことでしょうか。

金子 難しいのは、未診断の生徒です。「障害」という事実へのアプローチから入らないといけません。

ただ、この「障害」という言葉には、私も違和感があります。別の言い方がほしいですね

普通高校でも、ここまで取り組もうとしている高校があることは驚きでした。

「どんな生徒も支援を必要としている」という金子先生の言葉が、重く残ります。神奈川が「特別支援教育」ではなく、あえて「支援教育」と名付けたことの意味は、このことだったのではないのでしょうか。

「普通学級をすべての子のために」という願いのひとつの手がかりを、出雲崎高校で見たように思います。

